作曲並びに創作教育

音楽教育専修　　佐　原　秀　一

研修コース内容

今回の研修題目を「作曲並びに創作教育」としたが，私自身の本研修に託す意図は，それを核として，より広範囲に音楽教育全体にかかわる根本的な問題点の所在を，教育現場で多くの経験を積んでこられた研修者とともに考え認識してもらい，その視点から問題解決につながる示唆を与えることにあった。

音楽教育の研究会などの研究題目や理念を表す時に必ず登場するキーワードがある。感性・感情・情緒・情操・表現などの名詞，美しい・豊かな等の形容詞等々，これらは音楽教育の目的や，そのあるべき姿を示す言葉の中に頻繁に用いられてきた。しかし，これらの言葉は決して音楽だけに占用されてきた言葉ではなく，我々の生活全般にわたって広く用いられ，しかもあいまいな状態や概念を表す言葉として使われてきたものである。

自分の思いを豊かに表現できる子を目指して
仲間とかかわり合いながら表現を深めていく子供
豊かに表現できる子を目指して
仲間と磨き合って，より豊かな音楽表現を求め続ける生徒の育成
自分の表現を切り拓き，豊かな表現を求め続ける子の育成

上に挙げたものは，最近公表された音楽教育の研究題目の例である。また，本年度教育学部で発行した教育実習の手引きの中，「音楽の授業」の箇所には，「音楽科の授業を考えるとき，教科の本質や大切なことは何ですか」の問いに「豊かな情操を養う音楽科の授業」であるとし，目標は学習指導要領の「表現及び鑑賞の活動を通して，音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てると共に音楽活動の基礎的な能力を培い，豊かな情操を養う」であるとしてここに掲げられている。

この中では上に挙げたキーワードが音楽教科の特質を示す重要な言葉として頻繁に用いられていることが分かるが，本来これらの言葉は全ての教科全体について共通に用いられるべきものであって，何も音楽や芸術分野に限って用いられる固有の言葉ではないし，しかも同時にこれら教科のほんの一面しか表していないことは，自明のことである。

音楽教育に関係する根本的な問題の多くは，実にこの不明瞭な言葉でしか表現できないほどに具体性を欠く不明確な実態が，音楽教育を覆っている点にあると言わざるを得ない。

結論から言えば，私の本研修の目的は，音楽教育を覆っている不明瞭さを払拭することと，現場教員の誤解を解消し，その視点に立脚した確固たる指導法を提案することにあると言える。

研修教員の問題意識

今回の研修者であるA氏の研究課題は「練りあう・高まり合う仲間づくりをめざして～一人一人が生き生きと表現し，豊かな感性が育つ授業～」というものであり，大学研修における自己の研修構想は「児童が生き生きと表現する音づくりの授業についての指導法について学ぶ」というものであった。私は，研修者からこのような研修構想が提示されることを予期していた。と言うのも，多くの音楽教科の研修や研究授業での大方の題目は，上記に示したものも含めてこれに類似したものが圧倒的に多く，教育現場での問題意識もほぼこの点に集中していたからである。

A氏は，今回の研修を受ける以前，普段の授業運営の中で，私が今回問題とする箇所に関しての疑問をうすうす感じていたいたようで，A氏が普段から音楽教育の在り方や児童にすべき具体的な指導法を真剣に模索していた様子が，私との対話の中から窺われた。

アドバイス

本研修では，何の疑いを抱くこともなく多くの音楽教育現場で行われてきた過去の授業内容の問題点の中から研修題目に関連する事例を一つ一つ具体的に提示し，特に音楽の根幹にかかわる問題から作業を進め，受講者が十分納得するまで徹底的に討論し，今回の研究課題に繋げていくこととした。

次に今回の研究課題の問題解決に直接関係している過去の私が直接見聞した授業等の中から問題ありと思われる例を挙げることとする。

例1　ある学校では，音楽作品を生徒に理解させようとして，数枚の色の異なるセロファン紙を渡し，生徒が思い思いに色セロファンを楽譜に貼り付けさせる授業を行っていた。私が青いセロファンを貼り付けている生徒がいたので「あなたは何故青いセロファンを貼っているのか」と尋ねると，生徒は「青い山という歌詞があるから」という答えであった。この曲には同じ箇所に他の歌詞も添えられており，ここには青いなる文字はなかった。

例2　ある学校では，数枚の絵を生徒に見せて，その印象を予め用意された楽器で表現させよう，とするものであった。

例3　ある学校では，歌とともに身体表現と称するものを科していた。

例4　児童に様々な言葉による感想を求めるたり，音楽作りをみんなで考える授業。

上記4例の問題点について言えば，共通して教師の音楽言語の表現領域に関する誤った認識があることが分かる。

例1の場合，このような指導法についての問題点は，少々考えれば分かることである。教材として使用されている曲には一つの旋律に二種類の異なった歌詞付けられていたわけであるが，こう言ったケースは非常に多く見られるものである。一般に歌曲は，既製の歌詞に作曲家が曲を付けると言った方法で作られる。作曲家は，歌詞のイメージから楽曲を表出するのに相応しい音楽言語や作曲方法を選び曲を作ってゆく。その場合作曲家にとって歌詞は，歌詞とは関係のない音楽言語領域の言葉を誘い出す呼び水のような働きをするものなのである。

この授業の場合教師は、音楽言語領域の事項を理解させるために，歌詞に使われる日常の言語領域を足がかりとして，これらと表現領域の異なったセロファンの色彩を利用しようとしたわけで，二重の誤りを犯している。そのため，問題解決の筋道を混乱させ，児童達の理解を不可能にした事例と考えられる。

少々唐突に思われるかもしれないが，因みに，この事例で使用された教材に替えて，誰でもが知っているベートーヴェンの第９交響曲の合唱の部分を使用した場合，この作品を理解させようとして，数枚の色セロファンを使用する教師は本当にいるだろうかと。以前，長年音楽教育に携わってこられたある先生にこの話をしたところ，このやり方に心からの理解を示されたことに，筆者自身大変驚いたことがあった。

例２の場合も音楽言語の表現領域に関連した誤りの例である。

一般に音楽や絵画等の芸術をひと括りにして，表現領域が同じであるかのように錯覚する向きもあるように思われる。事実，音楽の作品の中には，ムソルグスキーの「展覧会の絵」に代表されるように，絵画から発想された作品は少なくないため，多くの人がそのように誤解しているのではないか。しかし，これも少し考えれば理解されるように，ムソルグスキーの曲から複数の人が同じように原画を再現することなどは到底不可能であるのと同様に，原画から「展覧会の絵」の曲を想像できる人など一人もいないであろうことは，誰にでも理解されることである。以前，私の授業でラヴェルの「水の戯れ」というピアノ曲を，題名を告げずに聞かせたことがあった。鑑賞した後受講者に何を感じたかを問うたところ,「水」を想像した学生はその時一人もいなかったことがあった。そのことは，絵は絵，水は水，音楽は音楽と，それぞれの異なった表現領域を有する分野同士は，芸術の名の下に一見関連があるようでいて，実際は没交渉なのであり，音楽分野について言えば，音楽は音楽の言語で語られた領域以外を表現することが不可能であることを示している。では実際にムソルグスキーやラヴェルが，このようなことを何故成せたのかと言えば，彼らは音楽言語を熟知していたに他ならない。絵や水から受けた印象を，極めて具体的な音像として構築するための方法を身につけていたからである。しかし，このように音楽言語に精通している者にとっても，音楽を創り上げることは，大変至難な作業である。ラヴェル自身も極度の集中と膨大な時間と最大の努力を払って，この曲を作曲したものと推察する。ましてや，小学校の一般の児童が音楽言語について理解しているとは到底思えないのであり，このような授業や研究題目は，問題提起の段階で既に破綻していると思われる。

なお，筆者は嘗て，本学の音楽講座学生を使って上記の「絵から音楽」への実験を試みたことがあったが，誰も満足にできなかったことを，付け加えておく。

例３も同様な問題のある例である。

音楽教育の現場では，身体表現と言われる言葉がしばしば登場する。児童がリズムに乗って身体を左右に揺りながら歌う姿を目にすることも多い。先生方の多くもこのような現象を好ましいこととして，評価されているものと思う。それは大衆音楽に見られる振り付けを伴った歌謡の影響も考えられるかもしれない。しかし，音楽の世界においては，身体表現なるものの善し悪しが演奏や音楽の評価には繋がっていないのは周知の事実であり，グレングールド等の演奏中の特異な行動は話題にはなるが，演奏の評価とは無縁である。

身体表現は，ダンス等の身体を使ってある状況を表現（ダンスの言語で）することを意味する

のであって，本質的に音楽とは関係がない。

音楽の分野にはダンス音楽やバレー音楽が存在するので，これらと関連づけて考えられているものと思われるが，身体表現・音楽表現双方とも他の芸術同様に言語表現領域は別のものであり，一緒に考えるのは難しい。ただし，ダンス音楽等が存在するのは，共に時間を表現媒体としている点に，共通項を見いだすことができるためである。

一般に身体表現と言われているものは，その多くが音楽活動に伴った身体反応であろうと思われ，特に児童を評価する場合，そのような身体反応を単純に学習への積極的な意欲等々と見るのは，各自の個性の問題と絡んで危険である。

例4の場合，現場で指導されている先生方は，児童の学習過程を把握する必要や，音楽をみんなで考え作り出すために，様々な質問をすることが多々ある。質問をしない授業などは考えられない，と言われる先生方も多いものと思う。しかし音楽は独自の言語体系を持っているため，それを日常の言葉で表現することは大変難しい。と言うより不可能である。そうであるから，音楽は聞き手によって様々な言葉による解釈が成り立つものであり，また，どのように解釈しても構わないと言っても過言ではない。それは，日常の言葉と音楽の言葉とは無関係であるからである。

また，普段の授業の音楽作りに，先生が児童の様々な意見を聞くことはよくあることである。しかし，交響楽団や合唱団等の大勢で行う音楽の練習時に指導者が団員に一々表現方法や音楽作りを相談しながら曲作りをすることなどあり得ないのであり，仮に複数の意見が介在することになれば，かの有名なバースタインとグレングールドの競演のような二つの意見が対立する異常な事態となるのである。このように，音楽の表現等に関しては，音楽の演奏等をコントロールする司令塔は単独であるべきであり，他の意見の介在を許すべきではない。したがって，極めて未熟で何の手だても持たない児童たちに意見を求め授業を進めるのは，沢山ハンドルのついた自動車を無免許で運転しているのと似ている。

以上のことから，最初の段階において教師は，伝統的な方法に則って音楽の作り方やフレーズの問題などに関係する基本的な事柄や，様々な音楽の持つ固有の考え方（伝統的な考え方）を児童達に伝え（言葉による学習），児童達が考えるための材料や手だてを提供することが不可欠であることが理解されるが，これに先だって重要なことは，音楽は音楽の言葉で思考することなのであり，それには音楽の感動を直に言葉抜きで感得できる場（音楽言語による学習）の体験から始めることなのである。したがって，教師の任務はそのような場を教師自身の責任と意志で設けることであり，それが満足されれば初期の段階の教育は十分達成されたものと思われるである。

研修教員の学習展開

先に音楽を表現する言葉の曖昧さを指摘したが，言葉の曖昧さは本来具体的でなくてならない音楽教育そのものを曖昧にし，ひいては指導法を誤らせることに繋がっているそのような現状をA氏は，普段の授業を通してある程度意識していたため，学習展開は速いペースで進んだ。

学習展開の中で導き出されたことは，次に示すものである。

①児童に課題を与える際，この課題を先生自身が的確に処理することができるのか，点検する。

②先生自身が過去に受けてきた全ての音楽教育の有様と自身の学習過程を今一度点検し，その

検証を踏まえて教育方法を立案する。

③音楽への動機付けの観点から音楽教育を捉え直す。

④音楽は抽象的な芸術であるが，その抽象的な世界を構築するための作業は，極めて具体的である。音楽教育で求められているのは，この具体的作業に立脚した指導法の確立である。

⑤音楽言語による思考を促すため，むやみに意見や回答を求めない。

⑥児童が心を解放し，直に音楽と対面できる場を設定する。

⑦児童に音楽を思考するための材料や方法を提供する。

今回の研究課題である「生き生きと表現する音づくり」の箇所で問題を指摘すれば，表現手段を持たない児童にとって，生き生きと表現することは到底不可能であることと，これと連動してこの道筋による音づくりも難しいことが挙げられよう。

このことから，より具体的で児童たちの手の届くところにを研究題目を設定することが望まれるのであり，そのためには，学校での音楽教育という狭い世界での思考から離れ広く音楽の原点から再考する必要がある。しかしながら，何よりも児童が「楽しい」と感じる音楽の授業を行うことが，音楽言語による思考へ導く重要な要因となることは，特に心すべきことであると思う。

研修教員との関わりの意義

研修教員に問題点を十分に理解してもらうためには，膝詰めで徹底的に議論できる場がどうしても必要なのである。というのは，教育現場で数々の問題を抱えなが授業を進めてきた先生方は，個々の問題の解決に直接繋がるヒントや方法を指導教員から直接即答のかたちで具体的に示してもらうことを欲している訳であるが，特に教育現場に当たり前の如く蔓延している上記の如くの誤った見方や教育方法等を是正した上で解決策を提示することは，場合によっては研修教員のそれまでの教育基盤の根幹に関わる問題だけに，指導者にとって至難なことが多い。したがって，指導者は，個々の問題箇所とその解決方法を一方的に全て回答するのではなく，研修教員に多方面から様々に助言することで研修員自らが問題箇所を認識し，そこから一つ一つ納得しながら問題解決への道を歩み，問題解決の方法を身につけるまでの過程を設定し，その時間を共に過することが求められるからである。そこに研修教員との直接的関わりの意義があるように思う。

結び

音楽教育に関わる問題は多岐にわたり，尚かつ個々の問題が複雑に絡まっているために，その解決は容易ではない。しかし，もう一度本源に立ち返って考えると，その解決法は意外に単純な形で見えてくるように思える。

現在我々は，音楽教育講座に在籍する学生以外の教員の卵たちに「音楽」という授業を行っているが，これらの学生の多くは音楽の知識や基礎的能力についてかなりの問題をかかえている。基礎的能力の少しでも有る学生は，音楽の授業以外で音楽を学んだり音楽教室でピアノなどを習った経験者に限られる。そのことは，小中学校で学習した音楽の成果が殆ど無いに等しいことを物語っており，そこには「豊かな表現を求め続ける子供達」の成長した現実の姿がある。このような状況を見るに付け，上記の研究題目が余りにも現実とかけ離れていることに気づき唖然と

する。

音楽の人間の精神に直接訴えかける強いメッセージの重要性と，人間の精神文化に不可欠な音楽言語領域による思考法を考えるとき，今改めて音楽教育のなすべきことを白紙に戻って考え直す時期に来ているように思う。